

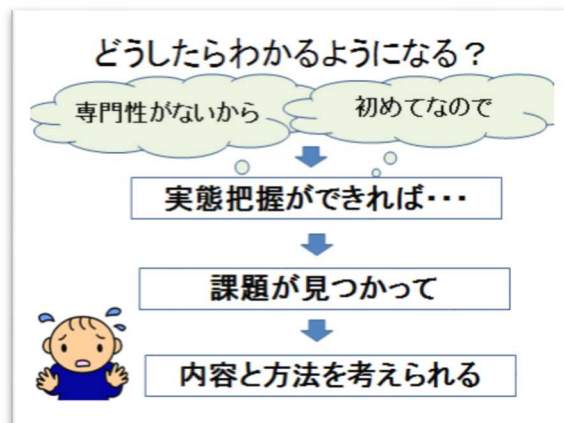
自立活動を考える

はじめに

「自立活動って、そもそも何?」「教科の指導とおなじ?」よく耳にする疑問です。特に肢体不自由の支援教育では、他の学校とは「違う感じ」が強いので「専門性がないとできない」と感じてしまう人が多いようです。

でも、それって本当でしょうか?専門性の有無が、児童生徒の豊かさにどれほど影響があるのでしょうか?なくはないでしょう。けど、なくても豊かさにつながる力を見つけて育てたり、支援する方法を考えたりすることは可能だと思います。なぜなら、豊かさにつながるもっとも効果的な取り組みは、日々の小さな気づきと、もうちょっとどうにかならないかと考えることから始まるからです。これは単に、心構えの問題で、専門性の有無は全く関係ありません。だから「もうちょっとどうにかならないか?」と思うことから始めるようにしましょう。

自立活動の課題をどうやって見つけ、どう考え、どう指導するか、今回の自立活動学習指導要領改訂と絡めながら考えてみたいと思います。

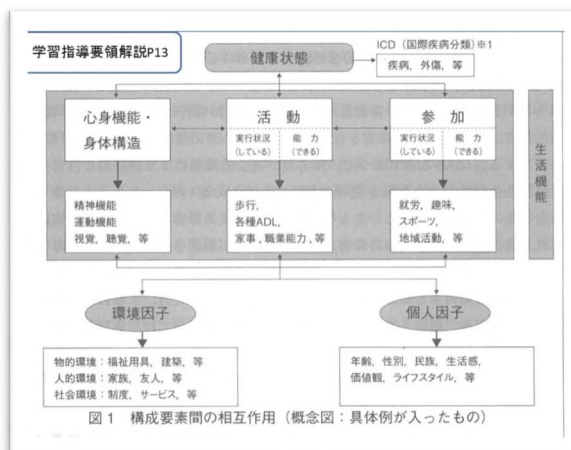
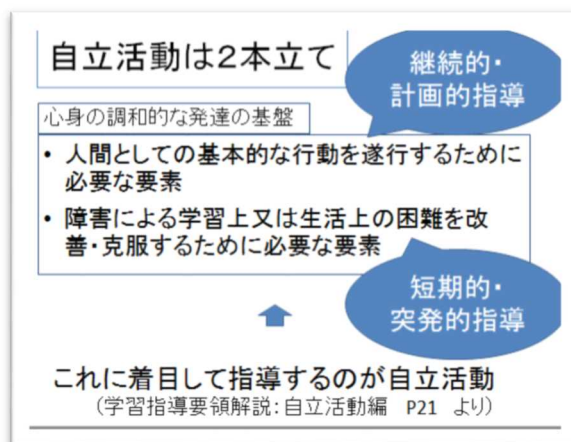


自立活動は2本立て

今度の学習指導要領解説には、自立活動は、人間としての基本的な行動を遂行するために必要な要素と、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するために必要な要素に着目して指導するように書かれています。

ここには、ICF（国際生活機能分類）の考え方が色濃く反映されています。ICFは、国連で採択された「障害者の権利に関する条約」を受けてまとめられたもので、人が「生きる」ということはどのような要素で構成されているかを整理してくれたものです。右の図（下）は、構成要素がそれぞれ相互に関係があることを示しています。

自立活動の「人間としての基本的な・・・」は、右下図の心身機能と活動あたり、「学習上又は生活上の・・・」は活動と参加あたりに該当すると思います。なので、「人間として・・・」は、気持ちをコントロールすることや、見たり聞いたりすることや、感じて考えることや、体を使うことなど心身機能に関わることと、食事をしたり、着替えたり、掃除をしたりなど活動に関わること等が着目すべきこととなります。また、「学習上または・・・」は、活動に関わることをふまえながら、学習活動や、係の仕事や、集会での司会、働く上で必要なことや、趣味などの楽しみ等の参加に



関わる事が着目すべきこととなります。(詳しく知りたい人は、ICFを参照ください)

なお、「人間として・・・」は、これまで基礎基本の学習の素となることとして養護・訓練で取り上げてきた中心的課題です。これは、継続的・計画的に取り組む必要がある課題です。それぞれの課題はどれも大切に、じっくりと取り組むことで成果もあがる課題です。細かな理論や方法も世の中にはたくさんあります。ただ、そこに埋没してしまう危険性もはらんでいます。養護・訓練から自立活動に名称が変わった一つの理由に、参加をめざすことが大切だということがあります。だから、自立活動では、「学習上又は生活上・・・」を重視する必要があるわけです。これまでのように、「人間として・・・」にばかり時間はかけることができなくなります。コツコツ時間をかけてやったことが「学習上又は生活上・・・」に活かないと意味はないのです。

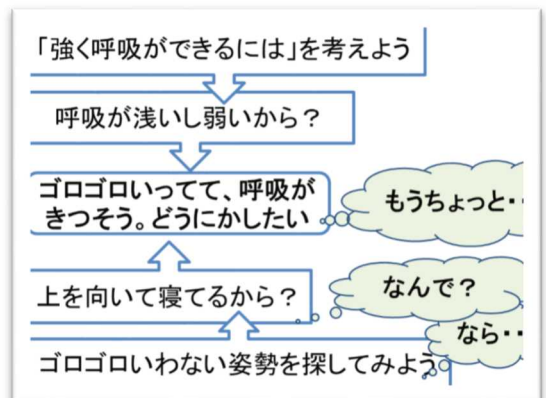
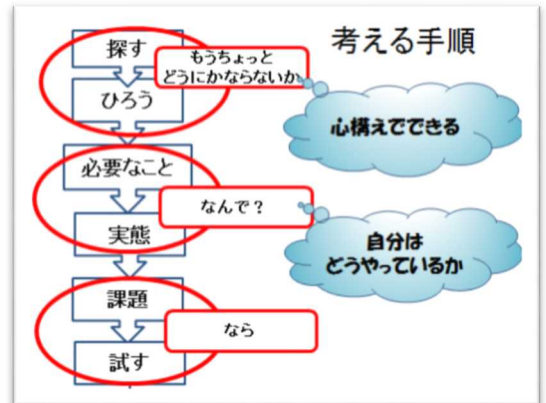
どう考え取り組むか その1 :もうちょっと・なんで・なら

では、どうやって障害からくる学習上又は生活上の困難さについて取り組めばいいのでしょうか。

それは、もうちょっとどうにかならないか?と試してみることにかかっています。

例えば、いつも呼吸をするときにゴロゴロ音がするのを、「先生ちょっと息が苦しいんですけど・・・」と言っていると受け止めて「もうちょっと・・・」と思えば、なんでそうなるのかを自分なりに考えることにつなげることができます。このポイントは「自分なりに」です。ここで「専門家じゃないから」はいりません。当たってようが、外れていようが、自分なりに考えることが大切です。そうしないと、「苦しい」と言っている子を意識の外に置いてしまいます。自分なりに考えれば少しは良い状況にもっていくことができます。ちなみに、悪い状況にしてしまったとしても、次に活かせばそれもOです。とにかく考えが浮かんだら「試す」ことです。分からない時は、自分はどのようにしているかを参考にするといいですよ。

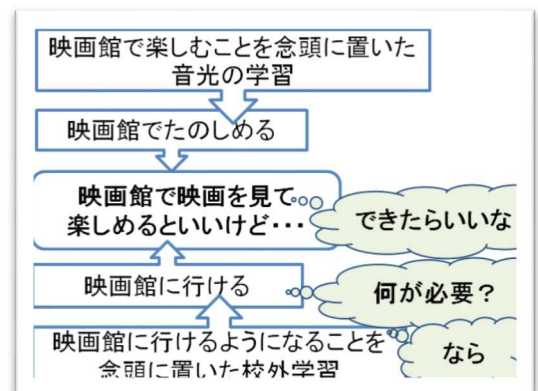
自分なりに考え、ゴロゴロの原因を上を向いて寝ていることだと思ったら、あとはゴロゴロいわない姿勢を探してみることです。これが「もうちょっと」「なんで?」「なら・・・」です。



どう考え取り組むか その2 :思いつきを活かす

あれこれ、試したり探したりしていると、「ひょっとしてこんなことできないかな」と思いつくことがあります。それをめざして取り組むのも一つの方法です。

例えば、学校で音や光を使った学習をしているときに、「これを、町で使うとしたら・・・」と発想を学校の外に広げてみて、「あっ、映画館!」と思いつく。その時の考える手順は、映画館で映画を楽しむことを真ん中に置いて、まず、映画館で楽しむことを実現するのに必要なことから考えるのがいいと思います。



そうすると、面白い校外学習や感覚遊び的な活動の計画につながります。

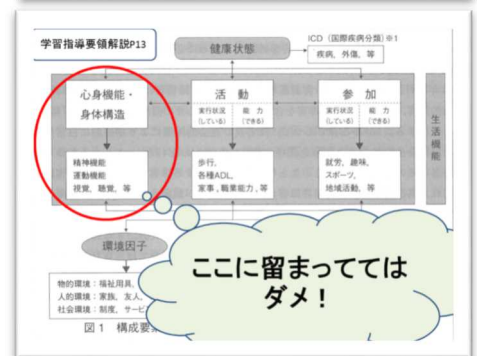
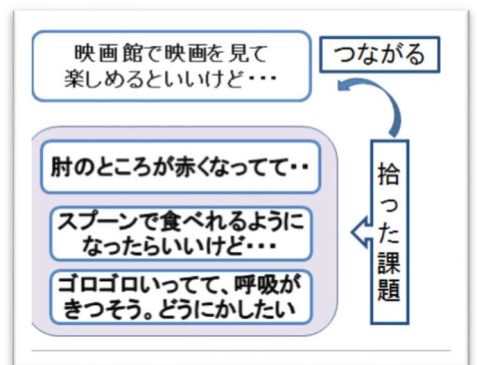
「ひろう」ことから豊かさはもう始まっている:ちょっと豊か

日常の学校生活の中で上手く課題をひろうことはとにかく大切です。これができて、それにとりくむことができれば、もう豊かに生きる力の育成ははじまっています。

例えば、肘のところが赤くなっているのをもうちょっと何とかしたいと考えた。あれこれ試して赤くならなくなった。それは「ちょっと豊か」になったということ。結果、椅子が長くゆったりと座れるものになっている。スプーンで食べれるようになったらいいけどと考えた。取り組んだことで、取り込むことや飲み込む力がついた。それが「ちょっと豊か」になったということ。結果、今まで食べれなかったものも食べれるようになり家や学校以外でも食事ができるようになっている。ゴロゴロが気になった。取り組んだことで、大きく息をすることや排痰を自分でもできるようになった。結果、元気になって外出できるようになっている。

ひろったことを改善することが「ちょっと豊か」になったということです。それらをさらにどんなことにつなぎ広げていくかを考えることが大切です。やりながら思いついたことをあれこれ試し、学校以外のいろんな場面にまで広げていくことが目標だからです。心身機能の所に留まっていたはだめなわけは、ここにあります。

とはいえ、なかなか広げたり、つないだりすることは難しいものです。だからこそ、「ちょっと豊か」を日々積み重ねることが、私たちに一番できることであり、大切なこととなります。

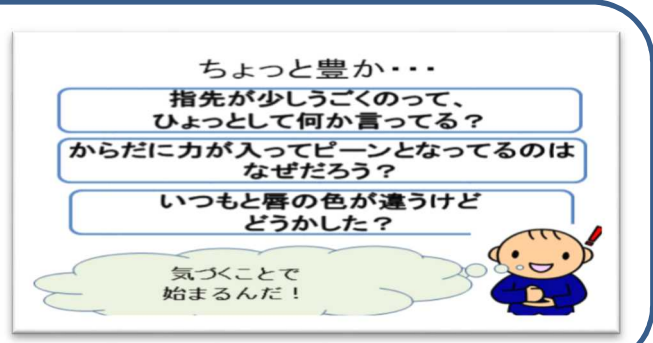


ちょっと一服

自分から、しゃべることもなく、表情の変化も乏しく、身体を動かすこともほぼないような児童生徒でも、必ず自分なりの方法で、思いを表出しています。

それに気づかないのは、受け手である私たちのアンテナが鈍感だからです。

気づけるようにアンテナの精度を上げる努力を続けましょう!



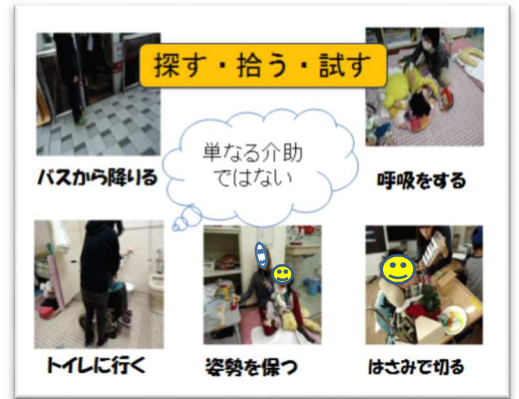
支援学校の介助は・・・

ひろうことからすべてが始まるので、もう少しそこを掘り下げます。で、大切なのが、「介助」です。

一般的に介助は、手助けといった意味で使います。が、支援学校では、もっと他の意味で介助を重要視する必要があります。それは、①児童生徒がどのように心や身体を使っているかを把握するためと、②どうしたらやりやすくなるか探るため、の大きく2つの機能を持たせるようにすることです。

例えば、全身を反るように力を入れる子がいます。特に飲んだり食べたりするとき力が強く入ります。そんな時は、だっこしてお茶を飲む（介助）と、いつ力を入れているか、どこにどの方向に力を入れているか、その時どうすれば、あまり力が入らないかなどが分かります。（どうすれば力が入らないかを探るとき、心の持ちようにヒントがあることがよくあります。ちなみに心と身体は、ワンセットです。）

つまり、介助を通して、困難さの原因を探ることができるわけです。何かができること自体を目的にした介助では何も見つけられません。何かを見つけるために介助をしましょう。



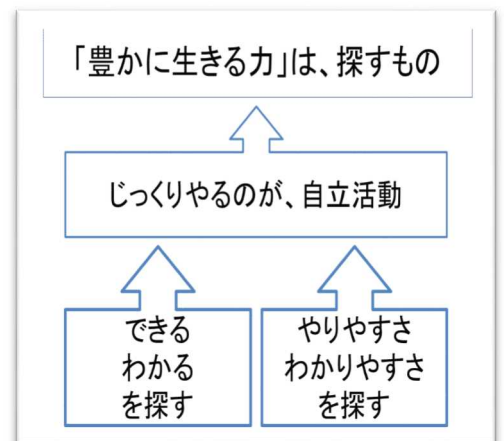
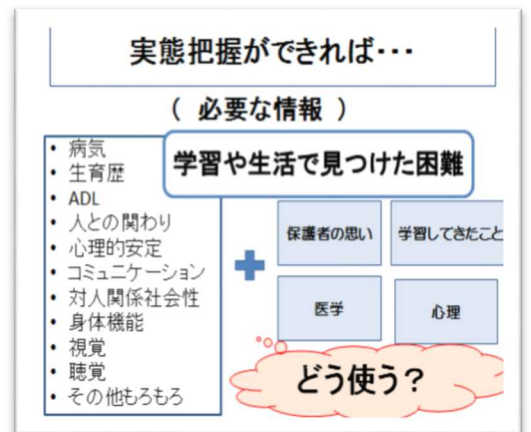
情報の活かし方:その1

情報は、たくさんあります。本校では、個人カルテの中に保管されています。病歴や家族構成、福祉サービスの利用状況、学習記録、教育相談の記録等々です。

これらは、あくまでローデータです。どう使うか？それが問題です。

今回の指導要領の改訂では、自立活動の6区分に沿って課題を整理し指導計画を立てる方法が例として示されています。それは、①実態把握のために必要な情報を収集する。②情報を整理する：・自立活動の区分に即して・学習上又は生活上の困難の視点で ③指導すべき課題を整理する：②で整理した情報からとりくみはじめる課題を抽出する ④抽出した課題相互の関係性を整理し、中心的課題を導き出す。⑤④に基づきねらい（指導目標）を設定する という流れで情報を活用する方法です。

この方法だと、学習指導要領の自立活動の中にとどまった指導計画になってしまうおそれがあります。問題は、最初の情報を6区分に沿って整理することからはじめるところで、過去の養護・訓練の時の指導計画を考える手順に似ています。つまり自立活動で着目する2つの要素のうち、人間として基本的な行動を遂行するために必要な要素には対応しやすいのですが、もう一つの要素である、障害による学習上又は生活上の困難を改善克服するために必要な要素には対応しにくい指導計画が考えられ、それに沿って指導を進めると、「人間として基本的な・・・



・」の指導だけで終わってしまうという問題を抱えているように感じます。

「学習上又は生活上の・・・」については、学校生活を過ごす中でひろく課題です。取り組みたい課題を見つけたら、それに必要な情報だけを選び出すのがいいでしょう。この時、「何か使える情報はないか？」という視点で情報を見直すことが大切です。自分がしたいことについて役に立ちそうな情報だけを探さないと、たくさんの情報によってかえって混乱してしまうことになってしまいます。

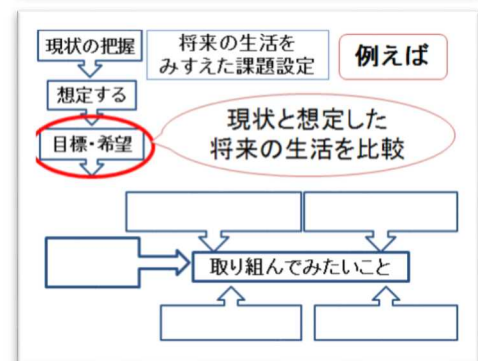
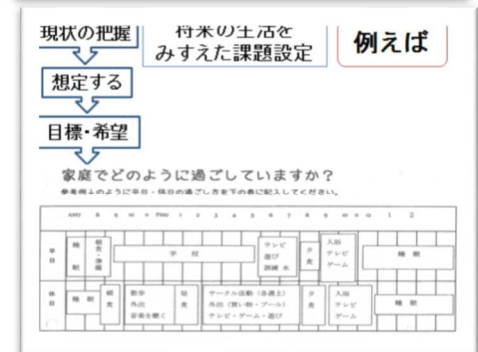
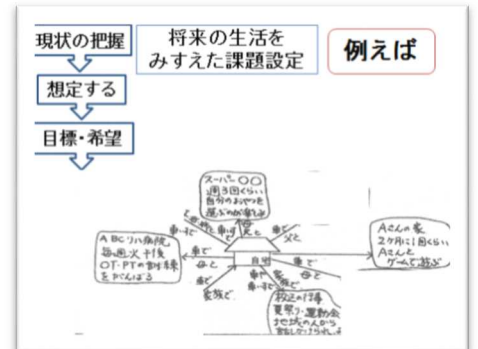
何か取り組んでみたいことが見つかったら、そのことについて「できる・わかるを探す」ことや「やりやすさ・分かりやすさを探す」ことに役立ちそうな情報だけを探し出して活用するようにしましょう。

情報の活かし方:その2

こんな情報の活かし方もあります。それは、保護者アンケートの情報を活かす方法です。

例えば、生活地図。家を中心にどこにどれくらいの頻度で誰と外出しているかが表されています。この地図から取り組んでみたいことがあるかを考える。あるいは、一日の過ごし方を見て、同じように取り組んでみたいことがあるかを考える。もし、取り組んでみてこの地図や家庭に、何か加えることができたとしたら、「ちょっと豊か」になります。

現在の生活について取り組むだけでなく、すこし将来の生活を想定してみると、具体的な目標を設定しやすくなることもあります。取り組んでみたいことを思いついたら、それを真ん中に置いてあれこれ考えてみると、面白い取り組みができるかもしれません。



肢体不自由特別支援支援教育って？

本校は、肢体不自由特別支援学校です。つまり、肢体不自由の児童生徒に、特別な支援を行う学校です。

「どういうこと?」。ここを、ずっと考えています。本校は。

その過程で生まれたものが、本校の理念の基にある、『障害があるから〇〇デキナイ』とは決して考えず、「どうしたら〇〇デキルか」を考え、参加をめざそう!』という考えです。

これを、やり続けるためのキーワードが「探す」と「試す」です。特別支援教育の世界に正解はありません。どのケースもやってみないと分からないのです。おそれずに、やってみてください。

肢体不自由特別支援教育って？

発想の転換が必要

「障害があるから〇〇デキナイ」
という見方・捉え方ではなくて
「どう工夫したら〇〇デキルか」
「どうやったら活動に参加できるか」

本校は、
このために
あります。

デキルことを活かす

探す・試す

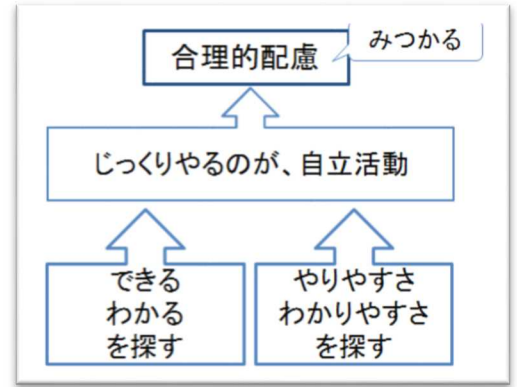
合理的配慮

合理的配慮が、法律で制定されたので簡単に触れたいと思います。合理的配慮とは、2016年4月に施行された「障がい者差別解消法」に基づき、学校現場でも、障がいのある子どもが、他の子と平等に「教育を受ける権利」を享受・行使することを確保しなければならないとしたものです。つまり、障がいのある人が何かをしようとしたときに、そのさまたげとなるものを取り除いたり軽減したりするための配慮です。

これは、今までの考えを実践することで見つかります。

例えば、国語の勉強で、文章を読みとることを学んでほしい時、読みとる前に「そもそも見えない」。これが何かをしたと思った時の障がいです。他にも、街に買い物に行きたい時に、段差があって歩きにくい。等々、〇〇したい時にさまたげになることが障がいで、それをどうにかする方法を考えて実行することが合理的配慮になります。

この「合理的配慮」は、活動の様子を見て、もうちょっとどうにかできないかと思ったことについて改善・克服する工夫を、あれこれと試行錯誤をすることで必ず見つかります。そのためにはじっくりと時間をかける必要があります。だから特別支援学校には自立活動の時間を設けています。



やっぱり勉強せんといかんね

取り組んでみたいことを見つけて、ひろいだし、もうちょっとどうにかできないかを考え、なぜそうなっているか原因を探り、改善策を試してみる。試しながら、いい方向に向かっているかどうかを考え、その原因を検討し、次の作戦を考えて試してみる。これが、障害からくる学習上生活上の困難さに対する取り組みの基本的な流れです。

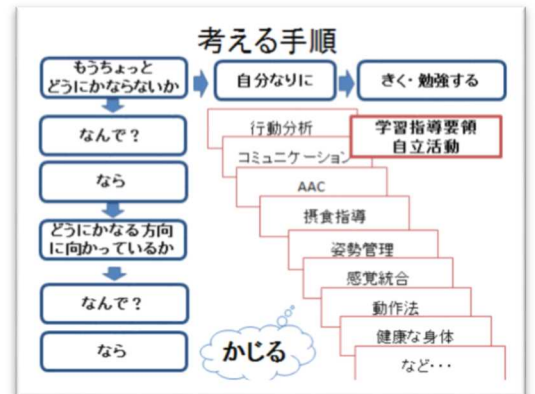
この時、今の自分でできることを精一杯やるしかありません。それが「自分なりに」やるということです。もっともダメな考えは、先にも触れましたが、「専門性がないから」とか「はじめてなので」と考えてしまうことです。そう考えた瞬間、思考することを放棄してしまうことになりかねません。

自分なりにやることで、発見もあるし……。専門家が一番ってこともないし……。全く的外れだと思ふようなことで、グッと伸びることもあるし……。

とにかく何でもやってみてください。

とはいえ、参考にしたいことはたくさんあります。それを手に入れるには、周りの人に聞くか、自分で勉強するかしかありません。尋ねないと、誰も教えてはくれません。研修は、自分で探して飛び込まないと役に立ちません。

自分なりに創意工夫してあれこれ試しながら、いろんなことを学ぶことで「もうちょっと……」の視点やアイデアが広がり、試せることが増えていきます。勉強は、かじるだけでも違うので頑張ってみてください。



展開図的な思考の方法

今回、自立活動をどう考えるかと考える手順について話してみました。この考え方は、展開図的な思考の方法をもとにしています。

「展開図」は、昔々南福岡特別支援学校が自分たちで考え出したものです。当初は個別の支援計画を考えるときに使っていました。教育相談や保護者面談や外部との連携会議等でも活用し、なかなか好評を得ていました。が、今は使われていません。

展開図そのものはさておき、この考え方は、いろいろな場面で活用できる考え方なので是非参考にしてもらえればと思い再度登場してもらいました。書き出すことをしなくても、頭の中で考えられるようになるとき役に立つと思います。

ここでは、特徴と注意事項だけあげておきます。

【特徴および注意事項】

- ・ 作ることが目的ではありません
- ・ ただの「考え方」です
- ・ 中心的な課題（取り組んでみたいと思ったことなど）と、それに関連する事柄の相互関係を把握しやすくなります
- ・ この考え方はいろいろなことに応用できます
- ・ 頭の中で使えるようになると便利です
- ・ 特に複数で話し合うときに便利です
- ・ 「なんで？」のときは、できない原因だけでなく、できるために必要なことも考えるのがポイントです

